

「子どもと暴力」をめぐって

照本 祥敬（中京大学）

Terumoto Hirotaka

- わたしの研究テーマは、大別すると、二つになります。一つは、学生時代からつづけている生活指導に関するものです。いま一つは、沖縄時代に出会ったアメラジアンと呼ばれるエスニック・マイノリティ・グループの教育権保障に関するものです。以下では、このうちの前者について最近考えていることを記していきます。
- いまにはじまったことではありませんが、「子どもと暴力」をめぐり課題は、生活指導に関心をもつ者であれば避けて通ることができません。1980年代の「校内暴力」が全国的に吹き荒れていた状況や、あるいは1990年代からの『『キレる』子ども・若者』という（おとな社会が形容する）問題状況は、「教育問題」の枠組みをこえて「社会問題」化したものといえますが、それだけに、「子どもと暴力」を「問題」にする、その姿勢のありようが鋭く問われます。なぜなら、その「対策」を論じる手法もふくめ、この一連の過程に、かれらの暴力の誘発ないしは再生産に決着するような政治力学が作動しているからです。このことは、新自由主義的競争秩序の強化を下敷きにした「規律」「規範意識」の強調や、あたかも処方箋であるかのように「ゼロトレランス」を推奨する昨今の行政主導の教育「改革」の図式をみれば明らかでしょう。
- このように、「子どもと暴力」をめぐり問題群は、その時代時代の政治社会状況を色濃く反映させるわけですが、では、いま現在のそれをどうとらえるのか。1997年以降の「新しい荒れ」が広がっている、と尾木直樹さんは指摘しています（『思春

期の危機をどう見るか』岩波新書、2006年）。この「新しい荒れ」とは、いわゆる「キレる子」現象をさしているようですが、成績や家庭環境も「良好」で、「おとなしい」「フツウの子」が家族や友人など身近な人間関係領域で引き起こす暴力が広がっている、と述べます。そして、かつてのような低学力や劣悪な生活環境などを背景にした「生活病理」的な暴力ではなく、こうした「関係不全の状態」の進行による「社会病理」としての暴力の遍在が「思春期の危機」をもたらしていると結論づけます。

- たしかに、尾木さんが指摘するような「新しい荒れ」の状況は今日もつづいています。メディアの報道姿勢にかなり左右されるが、世間一般の関心を集めるような事件では、尾木さんの指摘を追認できるケースも少なからずあります。しかし、それは、今日的「危機」の表層をとらえているにすぎないのではないかと。表層における「社会病理」としての発達疎外状況を問題にしているにすぎないのではないかと。むしろ、尾木さんが後景に位置づける「生活病理」としての暴力・秩序破壊が急激に浸透しつつある状況にこそ、今日的危機の本質が隠されているのではないかと、と考えています。
- 階層間の「格差」問題に連動したとらえかたですが、そう考えるヒントになったのは、ある中学校教師の指摘です。この教師によれば、従来は器物損壊、授業妨害、生徒間・対教師暴力の集積結果として学校破壊の状況がつくられていたが、今日では、ストレートに秩序破壊を目的としたトラブルや暴力が頻発しているとい

うのです。具体的には、従来から問題行動に加えて、騒乱による定期試験の中止や空き時間の教室への放火などです。こうした状況を、この教師は「学校を壊さなければ『呼吸ができない』『生きていけない』という子どもたちの大量の出現」と分析しています。

- 「危機」の根底にあるのは「関係不全」の問題ではなく、これもふくめて、さまざまなトラブルや暴力の根底にあるのは、学校秩序そのものの破壊だということです。

「秩序破壊」の文脈がすでに構成されており、この文脈のなかで「関係不全」に直接・間接に起因するトラブルや暴力が連鎖的に発生しているわけです。

- どのように秩序破壊の文脈はかたちづけられているのか？ 折出健二さんは、自由競争システムの歯止めのない拡張と、競争の過程および結果を「自己責任」として私化させる新自由主義の「人間性破壊作用」に着目しつつ、こうした社会支配の仕組みが「二重の仕切り」を生み出していると指摘します（『生活指導』2006年7月号）。「二重の仕切り」とは、「縦型の階層的・階級的な差別・抑圧」と「横の、『能力』間の棲み分け競争」という構図ですが、この抑圧的・暴力的な構造が強化されるほどに、その反作用として、暴力の偏在化が進行し、棲み分け競争の当事者の「あいだ」に隠されていた暴力がその「切れ目」から容易に噴き出す状況が作りだされるということです。

- 折出さんの見解は、秩序破壊の文脈がどのように構成されているかを考える手がかりを提示しています。縦軸での「能力」差別による棲み分けと、棲み分けられた水平面排他的競争、という「二重の仕切り」が子どもたちの日常を覆う「秩序」となっているということです。この「秩序」が強化されるほどに、かれらのあいだの緊張や不安、恐れが増幅され、これらが身近にいる他者やモノ、価値的世界との関係破壊を志向する暴力へと変換さ

れるわけです。

- あらためて指摘するまでもなく、棲み分け競争の檻の中で増幅される不安や緊張を対人関係の破壊や暴力、「弱者」への迫害によって解消することはできません。もともと、この不安や緊張は、「自己責任」の押しつけにより、「自分と和解しがたい事態」に投げ込まれている状況から派生しているからです。そして、どこまでいっても、この「和解しがたい」状態から脱出できないとき、そこに自己の生にたいする諦念が生じます。それは、もはや「自己責任」に決着する排他的競争への不安や緊張ではなく、この「自己責任」によってあてがわれた（あてがわれるであろう）「人生」をどうすることもできずにいる自分自身への不信とあきらめ、苛立ちであるということができます。

- 秩序破壊へとむかう暴力は、この「秩序」によって自己と世界への信頼を根こそぎ奪われつつある者の喘ぎを表しているように映ります。他者・モノ・自己との関係性が暴力的、破壊的なものとなっているとき、「自分と和解しがたい状態」から抜け出すことはできません。この状態にあるとき、暴力は、あてがわれた「秩序」の破壊にとどまらず、自分が生きていくうえで必要な足場をも破壊しつづけることになります。

- 「壊したくない」と思える世界の出現の成否が、あらゆるとりくみの根幹にあると考えます。自分にたいして平和的であること—おそらく、そう生きることを励まし、ささえてくれるものが「居場所」だとすれば、この居場所の発見や誕生を導く複数の回路を開拓していくことが切実にもとめられているように思います。さまざまな階層の子どもたちが肩を並べて生活と学習を共にする—この公教育のあるべき姿は、もうすでに大都市圏の公立中学校からは消えつつあります。こうした状況にあるからこそ、とりわけ社会的に不利な位置に追いやられている子ども

もたちが平和的に生きていくための足場を、教育と福祉にかかわる日々の教育実践をとおして創出すること、また、こうした視座から、公教育と学校の社会的役割と機能を再定義することが要請されているように考えます。では、どのような内実をもつものとして再定義するのか。目下、「自治と学びの教育」という視角から、この課題について考えている最中です。〈市民〉としての政治的教養と実践の基礎を育てる教育内容論の構築を構想しているわけですが(『生活指導』2007年6月号および8月号に関連したものを書きました)、まだまだこれからというところです。